

## 「フルベッキ写真」とは！？



「フルベッキ写真」とは、フルベッキとその次女・エマ（夭逝した長女と同名）を囲んで、致遠館の学生と岩倉具定・具経兄弟などが集まり、写真師上野彦馬によって撮影された集合写真の俗称。現在の研究では、撮影時期は1868年12月（明治元年10月-11月）頃とほぼ特定されている。この写真は古くから知られており、1895年（明治28年）には雑誌『太陽』（博文館）で佐賀の学生達の集合写真として紹介された。その後、1907年（明治40年）に発行された『開国五十年史』（大隈重信監修）にも「長崎致遠館 フルベッキ及其門弟」とのタイトルで掲載されている。

1974年（昭和49年）、肖像画家の島田隆資が雑誌『日本歴史』に、この写真には坂本龍馬や高杉晋作をはじめ、明治維新の志士らが写っているとする論文を発表した（2年後の1976年にはこの論文の続編を同誌に発表）。島田は彼らが写っているという前提で、写真の撮影時期を1865年（慶応元年）と推定。佐賀の学生として紹介された理由は、敵味方に分かれた人々が写っているのが問題であり、偽装されたものだとした。この説は学会では相手にされなかったが、一時は佐賀市の大隈記念館でもその説明をとりいれた展示を行っていた。また、1985年（昭和60年）には自由民主党の二階堂進副総裁が議場に持ち込み、話題にしたこともあったという。また、2004年（平成16年）には、朝日新聞、毎日新聞、日経新聞にこの写真を焼き付けた陶板の販売広告が掲載された。東京新聞が行った取材では、各紙の広告担当者は「論議がある写真とは知らなかった」としている。また、業者は「フルベッキの子孫から受け取ったもので、最初から全員の名前が記されていた」と主張している。

2009年現在、朝日新聞と毎日新聞は「フルベッキ写真の陶板」広告を掲載し続けている。

この写真の話題は間歇的に復活して流行する傾向がある。ちなみに最初に島田が推定した維新前後の人物は22人であったが、流通する度に徐々に増加。現在では44人全てに維新前後の有名人物の名がつけられている。現在でも土産物店などでこの説を取り入れた商品が販売される事がある。

また、大室寅吉という名で後の明治天皇が写っているとした説や、「明治維新は欧米の勢力（例：フリーメイソン）が糸を引いていた」説等の陰謀論、偽史の「証拠」とされる例もある。



グイド・ヘルマン・フリドリッ・フェルベック

グイド・ヘルマン・フリドリッ・フェルベック
1830年1月23日 - 1898年3月10日）は、オランダの法学者・神学者、宣教師。オランダ・ザイスト市出身。日本では発音しやすいようフルベッキ（Verbeck）と名乗り、現在に至るまでこのように表記されている。両親は敬虔なルター派の信徒とされているが、正確にはオランダ系ユダヤ人であり、いわゆる改宗ユダヤ人である。フルベッキはモラヴィア教会で洗礼を受け、同派の学校でオランダ語、英語、ドイツ語、フランス語を習得している。米国オランダ改革派教会から布教のため上海から長崎に派遣されたが、明治維新前の日本では宣教師として活動することができなかった。しばらくは私塾で英語などを教える生計を立てていたが、やがて幕府が長崎につくった長崎英語伝習所（フルベッキが在籍した当時は洋学所、済美館、広運館などと呼ばれた）の英語講師に採用された。佐賀藩主の鍋島直正等と親交があった。

また、オランダで工科大学を卒業した経歴から、工学関係にも詳しく本木昌造の活字印刷術にも貢献している。来日時、長崎の第一印象を「ヨーロッパでもアメリカでも、このような美しい光景を見たことはない」と記している。上野彦馬が撮影したフルベッキの写真が長崎歴史文化博物館に残されている。

### 熊沢天皇の出現 (1946.01)

http://www.ffortune.net/social/history/nihon-today/kumazawa-tenno.htm

1946年1月18日、南朝の子孫と名乗る熊沢寛道が自分こそが正統な天皇であると主張しているということが、米軍系の新聞「Stars and Stripes」で紹介されました。

訴えによれば、熊沢氏は南朝の最後の天皇である後亀山天皇の孫にあたる熊野宮信雅王の子孫であり、同家は代々自分の家こそが本来の天皇の正統であるとして「即位」をしてきたということでした。実際、寛道氏の父である熊沢大然氏も明治時代に、こちらが正統だという訴えを起こしています。

南北朝の時代のおさらいをしておく、事件の発端は88代後嵯峨天皇の皇子の後深草天皇が病弱であったことから早めに弟の亀山天皇に譲位した後で、後深草上皇の周囲で、皇統を完全に向こうに渡すのが惜しいという事で争いになりかけたところを鎌倉幕府の仲裁で、双方から交互に天皇を出すなどというとんでもない協定が結ばれたことです。

後深草天皇の系統＝持明院統 →後の北朝

亀山 天皇の系統＝大覚寺統 →後の南朝

時代はやがて元寇から鎌倉幕府が行き詰まりを見せ、大覚寺統の後醍醐天皇が『建武の中興』を行います、すぐに武士勢力と対立。その中心となった足利尊氏は持明院統の量仁親王を立てて天皇として即位させ（光厳天皇,\*1）、その天皇から征夷大將軍に任じられる形で、賊軍の汚名を着ないようにしました。

しかし尊氏らの勢力に終われた後醍醐天皇は三種の神器を持ったまま奈良の山奥に逃れたため、京都にいる光厳天皇と、同時にふたりの天皇が並立するという前代未聞の事態が起きてしまいます。

この付近の事情は極めて複雑で歴史家でも解釈が様々に分かれる。恐らく実情に近いであろう所を辿ると、元々後醍醐天皇は元弘の変で捕らえられて隠岐に流された時に退位しており光厳天皇は正式に即位していたと考えられます。しかしその後、後醍醐上皇が光厳天皇を無視して「自立登極」を宣言してしまったため、光厳天皇は事実上浮いてしまった。尊氏はこの事情に注目し、もともと光厳天皇の方が正統であると主張したのである。

しかし世の中はやはり覇権を取った足利家の方に傾いていきます。後醍醐天皇に最後まで付き従った楠木正成・正行親子が戦死した後は北畠一族らの少数の支援者にだけ支えられて、南朝側は細々とした生活を続け、結局三代將軍足利義満の時代、南朝の後亀山天皇が北朝の後小松天皇に三種の神器を譲り、そこまでは南朝側が正統であったが後亀山天皇が後小松天皇に譲位した、という形をとって南北朝は統一されました。

この統一の際、結ばれた約束ではその後北朝側と南朝側から交互に天皇を出すということにはなっていたのですが、三種の神器が戻った以上、足利家がそんな約束を守るわけもなく、その後南朝の系統が歴史の舞台に現れることは二度とありませんでした。また後亀山天皇の子孫については文献などの資料も曖昧であり、色々名前が残っている人についても、正確な所はよく分かりません。熊沢家が主張する「信雅王」についても、実際の所どうもよく分からない感じです。この戦後「熊沢天皇」が名乗り出た時も、当時の歴史学者はその信雅王の实在に否定的でした。

またもし熊沢家が本当に南朝の子孫であったとしても、歴史的に当時北朝側が勢力争いに勝利して皇統を嗣いでいく権利を獲得していたわけですから、今更こちらが正統などと主張しても意味がありません。そんなことを言っていたら日本中に何百万人という天皇の血筋を引く人たち（例えば清和源氏系の一族）にみな「我こそが正統」と主張できる権利があるでしょう。歴史は巻き戻しは効きません。

それよりもなぜこの時期に「熊沢天皇」などというのが話題になったのかということの方が問題でしょう。その鍵はなんといつでも第一報を報じたのが米軍の新聞であったことにあります。当時まだGHQは日本の行方がどうなるのかということに不安を持っていました。1946年1月1日には天皇に「人間宣言」などをさせて、神格化を否定しています。その直後の1月18日にこうう報道をしたのは、なによりも皇室の権威を少しでも揺るがしておこうという意図が強く働いていたことは間違いありません。

「熊沢天皇」は自らの正統性を訴えて全国を行脚しますが、反応は冷たいものでした。それに対して、昭和天皇のほうは自らの地位云々などは言わずに戦争で痛んだ国民を励ますために全国を回り、その姿にこそ国民は鼓舞され、復興を誓い、元気を取り戻していきました。そしてそういう状況を見たGHQも日本の帝国主義復活は無いと判断。この皇室こそがアメリカが支援すべき皇室だと認識します。そして「熊沢天皇」に対してはGHQも次第に冷ややかな態度を取るようになっていきました。

1951年には熊沢寛道は東京地方裁判所に自分の正統性を認めるよう裁判を起しますが、天皇は裁判権に服さないとして門前払いを受けました。その後は彼らは特に大きく報道されることもなく1966年死去しています。

## 南北朝正閏論

南北朝正閏問題

南北朝正閏問題

明治維新によって北朝正統論を奉じてきた公家による朝廷から南朝正統論の影響を受けてきた維新志士たちによる明治政府に皇室祭祀の主導権が移されると、旧来の皇室祭祀の在り方に対する批判が現れた。これに伴い、1869年（明治2年）の鎌倉宮創建をはじめとする南朝関係者を祀る神社の創建・再興や贈位などが行われるようになった。また、1877年（明治10年）、当時の元老院が『本朝皇胤紹運録』に代わるものとして作成された『纂輯御系図』では北朝に代わって南朝の天皇が歴代に加えられ、続いて1883年（明治16年）に右大臣岩倉具視・参議山縣有朋主導で編纂された『大政紀要』では、北朝の天皇は「天皇」号を用いず「帝」号を用いている。なお、1891年（明治24年）に皇統譜の書式を定めた際に、宮内大臣から北朝の天皇は後亀山天皇の後に記述することについて勅教を仰ぎ、認められたとされている（喜田貞吉『還暦記念六十年之回顧』）。ただし、これらの決定過程については不明な部分が多い。また、こうした決定の効果は宮中内に限定されていた。

一方、歴史学界では、南北朝時代に関して『太平記』の記述を他の史書や日記などの資料と比較する実証的な研究がされ、これに基づいて1903年（明治36年）及び1909年（同42年）の小学校で使用されている国定教科書改訂においては南北両朝は並立していたものとして書かれていた。ところが、1910年（同43年）の教師用教科書改訂にあたって問題化し始め、とりわけ大逆事件の秘密裁判での幸徳秋水での発言がこれに拍車をかけた。

そして、1911年（明治44年）1月19日付の読売新聞社説に「もし両朝の対立をしも許さば、国家の既に分裂したること、灼然火を賭るよりも明かに、天下の失態之より大なる莫かるべし。何ぞ文部省側の主張の如く一時の変態として之を看過するを得んや」「日本帝国に於て真に人格の判定を為すの標準は知識徳行の優劣より先づ国民的情操、即ち大義名分の明否如何に在り。今日の多く個人主義の日に発達し、ニヒリストさへ輩出する時代に於ては特に緊要重大にして欠くべからず」という論が出され、これを機に南北朝のどちらの皇統が正統であるかを巡り帝国議会での政治論争にまで発展した（南北朝正閏問題）。

この問題を巡って野党立憲国民党や大日本国体擁護団体などが当時の第2次桂内閣を糾弾した。このため、政府は野党や世論に押され、1911年（明治44年）2月4日には帝国議会で南朝を正統とする決議をおこなった。さらに教科書改訂を行い、教科書執筆責任者である喜田貞吉を休職処分とした。最終的には『**大日本史**』の記述を根拠に、明治天皇の裁断で三種の神器を所有していた南朝が正統であるとされ [3]、南北朝時代は南朝が吉野にあったことにちなんで「吉野朝時代」と呼ばれることとなった。それでも、田中義成などの一部の学者は「吉野朝」の表記に対して抗議している。

以後、戦前の皇国史観のもとでは、足利尊氏を天皇に叛いた逆賊・大悪人、楠木正成や新田義貞を忠臣とするイデオロギー的な解釈が主流になる。1934年（昭和9年）には斎藤内閣の中島久万吉商工相（政友会）が尊氏を再評価した雑誌論説「足利尊氏論」（13年前に同人誌に発表したものが本人に無断で転載された）について大臣の言説としてふさわしくないとの非難が起り、衆議院の答弁で中島本人が陳謝していたん収束した。しかし貴族院で菊池武夫議員が再びこの問題を蒸し返し、齋藤寅首相に中島の罷免を迫った。これと連動して右翼による中島攻撃が激化し、批判の投書が宮内省に殺到したため、中島は辞任のやむなきに至った（詳細は中島久万吉参照）。この事件の背景にはのちの天皇機関説事件につながる軍部・右翼の政党勢力圧迫があったとされる。

## 大日本史

『大日本史』（だいにほんし）は、日本の歴史書。江戸時代に御三家のひとつである水戸徳川家当主徳川光圀によって開始され、光圀死後も水戸藩の事業として継続、明治時代に完成した。神武天皇から後小松天皇まで（厳密には南北朝が統一された1392年（元中9年 / 明徳3年）までを区切りとする）の百代の帝王の治世を扱う。紀伝体の史書で、本紀（帝王）73巻、列伝（后妃・皇子・皇女を最初に置き、群臣はほぼ年代順に配列、時に逆田伝・孝子伝といった分類も見られる）170巻、志・表154巻、全397巻226冊（目録5巻）。

『大日本史』は光圀死後の1715年（正徳5年）、藩主徳川綱條による命名で、同時代には『本朝史記』や『国史』『倭史』と呼ばれている。質の高い漢文体で書かれ、記事には出典を明らかにし、考証にも気を配っている。

特色 [編集]

次の点が三大特色とされる。

神功皇后を皇后伝に列した。

大友皇子を帝紀に列した。

南朝正統論を唱えた。

全体的に水戸学＝大義名分論とする尊皇論で貫かれており、幕末の思想に大きな影響を与えた。歴代天皇が現在のものに改編されたのも『大日本史』の影響とされている。近代の歴史学においては久米邦武が頼山陽の『日本外史』と共に「劇本の類」と否定的評価を行っている。思想書物としては哲学者西田幾多郎が「明治大正の間、歴史の名に値するほどの著述」は「水戸の大日本史があるだけである。」として高く評価している。

橋本龍太郎の出自

「龍太郎の父龍伍は橋本卯太郎と大

室ヨネの間の子である」との事。（橋本龍伍の戸籍）大室ヨネは大室寅之祐の弟庄吉

の娘であるから、橋本龍太郎は明治天皇（従って今の皇室）と同じ家系と主張する

ことになる。

